（様式８）
(Attached Form 8)

論文審査の要旨
Summary of Dissertation Review

博士の専攻分野の名称 Degree	博　士　（　学　術　）	氏名 Author	川本　寛之
学位授与の要件	学位規則第４条第①・２項該当		

論　文　題　目　Title of Dissertation
原爆被爆者の「憎しみ」という思いについての一考察

論文審査担当者　Dissertation Committee Members
主　　査 Committee Chair　教授　川野　徳幸　　印 Seal
審査委員 Committee Member　教授　片柳　真理
審査委員 Committee Member　教授　吉田　修
審査委員 Committee Member　教授　小池　聖一
審査委員 Committee Member　准教授　友次　晋介

〔論文審査の要旨〕Summary of Dissertation Review

本論文は，原爆被爆者の思いに関し，2015 年の読売新聞社アンケートの自由記述欄の回答内容分析を援用し，通常顧みられることのない「憎しみ」という思いについて考察した論文である。何故，「憎しみ」という思いが表出しにくいのか，また，原爆被爆者の思いがどのように複層的かつ複雑に構成されており，その思いや主張が表出する内容に，一定の条件や方向性があるのか否かを明らかにしたものである。第一章では，本研究の動機，先行研究及び本研究との相違，研究の背景，本論の構成，研究課題，研究目的，重要性，独創性などをまとめている。第二章では，本研究に関係するアンケート調査及び先行研究の特徴をまとめ，第三章では分析の手順を説明する。第四章では，2015 年の読売新聞社アンケート調査結果を用い，「憎しみ」を持つ人，かつて持った人の背景などを検討した。第五章では，前章で得られた結果と 2005 年に朝日新聞などによって実施された同類の調査結果との比較検討を行った。第六章の結論では本論文での分析・考察結果を以下の通りまとめた。

次世代へのメッセージという設問に対する回答の中では「憎しみ」という言葉がほとんど出てこない。出てきたとしても，「憎しみ」という言葉の用いられ方の多くは「憎しみは何も生まない」，「前に進むために，憎しみを振り払う」という未来志向の意見を述べるために用いられるケースが多い。また，「憎しみ」の対象も原爆を投下したアメリカだけを指すのではなく「原爆」や「戦争」を憎むなど，複数の対象が存在している。しかしながら，単に「原爆を投下したアメリカへの思い」という質問をされた場合には，2015 年の段階でも４人に１人が「今でもアメリカを憎む」と回答したことについては，原爆被爆者のアンケート設問の捉え方に違いがあると考える必要があると説く。「次世代へのメッセージ」を聞かれた場合と，「過去に起きたことへの意見，思い」，そして「現在生じていることへの意見，思い」という設問内容の違いによって，原爆被爆者の回答の目的に違いが生じているからだと説明する。つまり，「過去に起きたこと」は許し難いことであるが，未来に同じことを誰にも繰り返させないために必要なことが何かを考えながら回答を行なうのである。このため，本音の部分では許し難い感情を有していたとしても，次世代

へのメッセージとして思いを表明する際には，たとえ「今でもアメリカを憎む」と回答した原爆被爆者であったとしても，その大多数が「核兵器廃絶」や「戦争の否定」を主張する。ただし，この場合に表出している思いの背景には，あくまでも人類の未来のために前を向いて生きる決意を述べた内容であって，過去に起きた事実，つまり原爆被害自体を許している訳ではない。このため，核兵器廃絶に逆行するような言説や行為が行われた場合に，根底にある「憎しみ」や許し難い思いが表出したり，過去の出来事だけに関する意見を求められた場合，一定数の原爆被爆者が「憎しみ」の思いを表明すると考察した。

学位審査の口述試験では，先の予備審査で指摘された点も大きく改善がみられ，統計学的分析も駆使し，これまで論じてこられなかった原爆被爆者の声に注目した労作であることが確認された。さらに，核なき世界，世界の恒久平和を希求するヒロシマ，さらには本国，そして平和を希求する本学にとって，有意義な研究であり，かつ学問的にも意義あるものであることも確認された。ただ，次の４点について確認あるいは修正することとなった。①第一章第三節「本研究の目的」の中に findings が紛れているため削除，②本文中に用いた図は出典を明示すればよいのか、それとも版元に承諾を得る必要があるのか否か，③文献表記の統一（最後に引用頁を示す），④指示語を明確にする（特に、本文 58 頁）。

上記については，後日，審査委員会は適切に確認・修正されていることを確認した。

なお，論文の一部は，川本寛之，Luli van der DOES，川野徳幸，「原爆被爆者は核兵器廃絶の可能性についてどう考えているのか」，『広島平和科学』38 号，57-82，2016 年，を含む 2 本によって発表済みであり，学位論文提出要件を満たしていることが確認された。

以上，審査の結果，本審査委員会委員は，本論文が著者に博士（学術）の学位を授与するに十分な価値があるものと認めた。